

**科学研究費助成事業 研究成果報告書**

平成 27 年 6 月 23 日現在

機関番号：32682

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2012～2014

課題番号：24501271

研究課題名(和文) アンケート調査に基づく歴史系地域博物館展示・設備の実践的研究

研究課題名(英文) A Practical Study on the Exhibition and the Facilities in the Local Historical Museum Based on a Questionnaire Survey

研究代表者

吉田 優 (YOSHIDA, Masaru)

明治大学・文学部・准教授

研究者番号：90267360

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 4,100,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、歴史系地域博物館を対象として地域住民が博物館に興味・関心を抱くために必要な展示・設備モデルの構築を目的としたものであった。

そのための具体的な研究として、地域住民に対して博物館に関する要望アンケート調査を行い、分析した結果を生かした展示・設備を構築して地域住民に公開した。さらに再度住民からの展示・設備に関する評価アンケート調査を行い、効果的な展示・設備モデルの深化を図った。

また、本研究の成果を社会に公開・発信することを目的として公開シンポジウムを2回開催し、最終年度には研究成果報告書を刊行した。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this study was the construction of the model of exhibition and the facilities which are need to make the local residents have interest about the museums for the local historical museum. As a specific study for that purpose, we did the questionnaire survey about the demand for museum, constructed and showed the exhibition and the facilities utilized the result of the analysis of it to the people. Moreover, we did the questionnaire survey about evaluation of them and tried to deepen the effective model of the exhibition and the facilities. In addition, we held two times of public symposiums for the purpose of opening and transmitting the result of this study to the society and published results of research report in the last year.

研究分野：博物館学 日本近世史

キーワード：歴史系地域博物館 博物館展示 アンケート調査 出前講座 展示講演会

### 1. 研究開始当初の背景

現在の歴史系地域博物館のおかれた状況は大変に厳しく、将来の見通しも決して明るいとはいえないように思える。文部科学省の社会教育調査によれば、歴史系博物館（博物館類似施設を含む）の館数・入場者数は、平成22年度調査が1717館・約6237万人、平成20年度調査が3327館・約7739万人であり、この18年間で館数が約1.9倍に増加したのに比して、入館者数は約1.2倍とそれ程増えていないことがわかる。このような状況にあって、歴史系地域博物館は如何にして従来以上の入館者数を確保することができるのだろうか。

そこで、歴史系地域博物館を対象とし、博物館利用の増加を期した研究実施を思い立った。

### 2. 研究の目的

歴史系地域博物館が観客や地域社会と向き合うことの必要性は従来から指摘されており、この点に関しては研究代表者も機会のあるごとにまずは地域住民を博物館に巻き込むことの必要性を説いてきた（吉田優「地域博物館の展示調査研究」『明治大学学芸員養成課程年報』、20、2009年など）。

従来の歴史系地域博物館が、地域住民を博物館に巻き込むことを成し得なかった理由の一つに、地域住民の要望に応じた展示がなされてこなかったことが挙げられる。博物館の設置段階において、展示に地域住民の要望を反映させることは皆無であり、この実際の展示と要望との乖離が、博物館を建物だけの“豪華な物置”としている要因と考える。また、伊藤寿朗氏が地域博物館は市民が自らの表現によって生活を築き、切り開いてゆくことができる力量育成の機会を保証・援助することが役割であると述べているように（伊藤寿朗『市民のなかの博物館』吉川弘文館、1993年）、地域住民が自主的に研究・学習をするための、研究・教育拠点としての役割を地域博物館が持つことも、地域住民を博物館に巻き込むためには重要であろう。そこで、本研究では地域住民の博物館に対する要望を収集・分析したうえで実際の展示活動と、地域住民が自らの関心に応じて、地域の事物を研究・学習できる設備を博物館に設けることで、住民を博物館へと呼び込むことを意図した〔アンケート調査に基づく歴史系地域博物館展示・設備の実践的研究〕を行うことを目的とした。

### 3. 研究の方法

#### (1) 対象地域の設定

本研究が対象とした地域は茨城県猿島郡五霞町である。当地を本研究の主要な対象地とした理由としては、第一に1970年代から現在に至るまで研究代表者が継続的に調査研究を続けていることが挙げられる。当然のことながら、地域の特徴を分かり易く伝えた展示の前提には現地調査による資料の収集・保存と

その検討を通じての地域文化・風土の特色の解明が必要であるが、研究代表者は五霞町町史編さん事業に関わっており、町史編さんの成果によって既に地域文化・風土の特色の解明が果たされつつあったためである。

第二に五霞町は、人口1万人未満、小学校2校・中学校1校であり、自治体規模でのアンケート調査が可能である点が挙げられる。さらに、町史編さん事業を通じて教育委員会や地域社会との連携がはかり易く、小・中学校で行う「出前講座」や自治体規模でのシンポジウム等を行うことが可能な状況下にあると判断した。

第三として五霞町の特徴が挙げられる。五霞町は猿島台地の先端にあたる地域であったが、近世から現代まで約400年間に及ぶ“利根川東遷”、つまり東京湾に流出していた利根川が、五霞町大字川妻付近の台地を開削することによって常陸川に繋がり、銚子から太平洋に流出することになった事業の重要地域として知られている。五霞町域は“利根川東遷”によって台地から切り離され、四方を河川に囲まれ、度々大規模な水害の被災地となった。水害の少ない台地から“利根川東遷”によって水害多発地帯へと変化した五霞町は、地域の特色が明確であり、これを活かした展示が可能な地であるとともに、水害や近世の土木事業を学ぶための教育活動の題材としても大いに有益な地であると考えたためであった。

#### (2) 研究課題と特色

本研究が取り組むべき課題は研究開始当初以下のように考えた。

地域住民の博物館に対する要望収集と分析

- ・出前講座とアンケートの実施
- ・地域住民を対象としたアンケート実施
- ・展示構想案の立案
- ・地域資料の収集・保存（撮影）・整理
- ・展示構想案の構築
- ・町史編纂事業成果の展示への導入
- ・展示構想案の立案と展示準備
- ・ビューワー・アプリケーションの開発
- ・展示・教育活動の実践的研究
- ・展示活動およびシンポジウム開催と住民評価（アンケート）の収集
- ・住民評価分析と歴史系地域博物館の効果的展示・設備の構築

歴史系地域博物館の利用者は、大人と子どもがほぼ均等であり、地域住民を博物館に巻き込むためには、両者の要望を取り入れることが必須であると考えた。そこで本研究では、博学連携を視野に入れつつ、小・中学生が自ら学習することができる展示・設備の構築も行うことにし、研究分担者が行ってきた博学連携での知見を活かした「出前講座」を各小・中学校で行い、地域の歴史の周知を促したうえでアンケート調査の実施を企画した。

本研究の特色は、第一に地域住民の要望・意見を取り入れた博物館展示・設備の構築を

行うことである。この点は従来の地域博物館構想において看過されていた視点であり、研究対象となる五霞町は、自治体規模でのアンケート調査が可能であるため、アンケート結果自体が今後の地域博物館設置における重要な資料ともなり得ると考えた。

第二に第1回のアンケート結果に基づいて構築した展示・設備案を実際に地域住民に公開し、住民の評価(第2回アンケート)を得ることで、真に地域に密着した研究・教育拠点としての〔歴史系地域博物館の効果的展示・設備の構築〕が可能になると考えた点である。このような地域住民参加型の博物館構想は、今後の地域博物館設置に際しての一つの方法論を提供することになるであろう。

以上の調査研究を基礎とした展示構想案を基に、実際に展示活動やシンポジウムを行い、再度地域住民の評価を得る〔展示・教育活動についての実践的研究〕を経て、地域に密着した研究・教育拠点としての〔歴史系地域博物館の効果的展示・設備の構築〕を目指すのが、本研究の研究目的であった。

### (3) 研究計画

当初、本研究はおおむね3つの段階に分けられて以下のように計画された。

第1段階では町史編さん事業での知見をふまえて五霞町の歴史についての出前講座を小・中学校で行い、小・中学生と地域住民を対象とした博物館に関するアンケート調査を実施し、望まれる博物館展示・設備の分析を行う。同時に、五霞町所在の文書以外の資料類(石造物・年中行事・伝統行事等)の収集・保存(撮影)も行う。

第2段階ではアンケートに基づいた展示・設備構想の構築を行う。

第3段階では第2段階で構築した展示・設備構想を実際に公開展示し、同時にシンポジウムを開催する。公開展示及びシンポジウムの開催によって、構築した展示・設備構想の評価を実際に住民に問い、再び修正を行うことで、研究・教育拠点としての地域博物館の意義を問い直し、地域において博物館が果たすべき役割を明確化させる。

なお、最終年度には研究の成果を広く周知するための成果報告書と小・中学生向けの副読本の刊行を予定していた。

## 4. 研究成果

### (1) 地域住民を対象としたアンケート調査

本研究の初年度である平成24年度に、対象地域である五霞町町民にアンケート調査を実施した。アンケート項目は、五霞町の歴史に関して興味・関心があるもの、博物館に対するイメージと利用頻度、博物館展示に関する要望等であった。このアンケートは後に開催する展示講演会の基本資料となるものであったが、「五霞町の文化財を守る会」の協力を得ることができ、一定の住民数からのアンケートを収集することができた。このア

ンケートの集計結果及び分析については、吉田優・築地貴久「アンケート調査の分析に基づく歴史系地域博物館の展示構想 プロジェクト展示「五霞の生活誌」の立案を中心として」として研究成果報告書に収録した。

### (2) 小・中学生を対象とした出前講座とアンケートの実施。

五霞町中央公民館郷土資料室の考古資料を用いた出前講座「“五霞町”の成り立ちを考えよう 縄文時代の五霞」を平成24年度に五霞町内の小学校2校、中学校1校で行った。アンケートは出前講座の事前・事後の2回にわたって行い、その成果は駒見和夫「出前講座による博物館リテラシーの育成支援 児童生徒と歴史系地域博物館に関する検討」(『博物館学雑誌』39-1、2013年)としてまとめられた。

### (3) 資料収集・保存の実施

五霞町史編さん事業を通じて存在が明らかになった五霞町元栗橋隆岩寺の所蔵文書及び五霞町域に現存する石造物の写真撮影・目録作成、隆岩寺文書についてはデータベースの作成を行った。隆岩寺文書・石造物については五霞町史にも一部紹介されているが、全体像の提示はなされてなかったため、成果報告書に両者の目録・画像等と、両者に関する論考を収録した。

なお、当初の研究計画で予定していた五霞町内の年中行事及び伝統行事の映像保存作業については、主催者・参加者のプライバシー保護の観点に配慮して今回は実施しなかった。

### (4) 公開シンポジウム「水でつなぐ北関東の歴史」の開催

当初、本研究の2年目にあたる平成25年度に開催予定であった五霞町での展示講演会が、共催予定であった五霞町教育委員会の都合により開催できなくなったため、本研究の中間報告的な意味合いも兼ねて、平成26年3月8日明治大学において公開シンポジウム「水でつなぐ北関東の歴史」を開催した。このシンポジウムには「五霞町の文化財を守る会」等の後援を得ており、五霞町の住民をはじめとして会場のキャパシティを超える160人以上の参加者に恵まれ、討論では参加者から本研究の今後に活用することができる貴重な意見を得ることができた。シンポジウムの報告者及び論題は以下の通りである。

- ・中村哲也(美浦村文化財センター)「縄文海進と猿島台地」
- ・須藤和佳(坂東市立猿島資料館)「平将門と内海世界」
- ・新井浩文(埼玉県立文書館)「栗橋城と周辺河川 関宿城との関係を中心に」
- ・和泉清司(高崎経済大学)「利根川水系の治水事業と伊奈氏」

- ・立石尚之(古河歴史博物館)「水をめぐる民俗と信仰」

(5) 展示講演会 見て学ぶ・聴いて学ぶ「水と五霞の歴史」の開催

地域住民や小・中学生に行ったアンケート調査の分析を基に展示講演会見て学ぶ・聴いて学ぶ「水と五霞の歴史」を平成26年10月25・26日五霞町中央公民館において五霞町教育委員会との共催及び五霞町の文化財を守る会・五霞町古文書クラブの後援を得て開催した。

この展示講演会はプロジェクト展示「五霞の生活誌 海と川と水のものごと」と講演会「新視点・五霞の歴史 水とのあゆみをひもとく」で構成され、2日間で100名以上の参加者に恵まれた。また、参加者には展示に関する2度目のアンケートを実施し、展示に関するさまざまな意見を得ることができた。展示内容、講演者及び講演題目は以下の通りである。

プロジェクト展示「五霞の生活誌 海と川と水のものごと」

1. 海辺の暮らしから 縄文時代の五霞
2. 河川と河川をむずぶ 鎌倉時代～戦国時代の五霞
3. 水に囲まれた町へ 江戸時代以降の五霞

\* 展示イベント

1. 土偶・土器に触れてみよう!
2. 拓本を採ってみよう!
3. 文書にふれてみよう!

講演会「新視点・五霞の歴史 水とのあゆみをひもとく」

(10月25日)

- ・森 朋久(明治大学)「五霞村の成り立ちと池沼」
- ・立石尚之(古河歴史博物館)「水をめぐる民俗と」

(10月26日)

- ・真家和生(大妻女子大学)「五霞冬木貝塚縄文人が伝えてくれるもの」
- ・新井浩文(埼玉県立文書館)「栗橋城と周辺河川 栗橋城の実測調査報告を兼ねて」

(6) 日本の地域博物館・科研費基盤研究総括シンポジウム「博物館展示教育の新地平 歴史系地域博物館の視点から」の開催

本研究の研究成果を外部に向けて発信し、その評価と問うための総括シンポジウムとして日本の地域博物館・科研費基盤研究総括シンポジウム「博物館展示教育の新地平 歴史系地域博物館の視点から」を御茶ノ水博物館学勉強会との共催で平成26年12月14日に明治大学において開催した。

吉田優「アンケート調査の分析に基づく歴史系地域博物館の展示構想」はこれまでの本研究の総括を試みたものであり、本研究の概

要とアンケート調査実施とその分析結果についてを中心に報告を行った。なお、前述の理由により当初平成25年度に行う予定であった展示講演会が、総括シンポジウムの直前の開催になってしまったことで、展示講演会で行った第2回アンケート調査の分析が間に合わなかったため、第1回アンケートの分析を中心に報告を行った。

また、シンポジウムでは本研究とは異なった視点から地域住民との協業や博物館展示教育活動に取り組む報告者に実践例の報告をお願いした。報告者と報告論題は以下の通りである。

- ・多田文夫(足立区郷土博物館)「調査事業と『足立風土記ブックレット』と常設展示リニューアル」
- ・小林聖夫(大田原市立両郷中央小学校)「小学校教育における博物館資料の活用 歴史系博物館利用を中心に」
- ・熊野正也(特定非営利法人博物館活動センター)「博物館展示と地域活動の可能性 葛飾区郷土と天文の博物館の考古学ボランティアの活動を例として」

シンポジウムには博物館関係者をはじめ40名以上の参加者に恵まれ、報告者・参加者を交えた全体討論では、今後の地域博物館再生へ向けた有意義な対話がなされた。

(7) 研究成果報告書『アンケート調査に基づく歴史系地域博物館展示・設備の実践的研究』の刊行

本研究を社会に広く発信するため、研究成果報告書『アンケート調査に基づく歴史系地域博物館展示・設備の実践的研究』を刊行した。報告書には、本研究の概要と成果をはじめ、第1部アンケート調査の分析、第2部調査資料目録、付録画像などを収録し、地域博物館、研究機関を中心に配付を行った。報告書の目次は次の通りである。

- ・吉田 優「研究の概要と成果」(第1部アンケート調査の分析)
- ・吉田 優・築地貴久「アンケート調査の分析に基づく歴史系地域博物館の展示構想 プロジェクト展示「五霞の生活誌」の立案を中心として」
- ・駒見和夫「出前講座による博物館リテラシーの育成支援 児童生徒と歴史系地域博物館に関する検討」(第2部調査資料目録)
- ・森 朋久「隆岩寺文書の解題・目録」
- ・森 朋久「隆岩寺文書をサンプルとした文書検索システムの紹介」
- ・吉田 優・小野真嗣・築地貴久「大字別五霞町所在石造物目録」
- ・小野真嗣「五霞町所在石造物の残存傾向とその分析」(付録画像)
- ・隆岩寺文書(一部)
- ・大字別五霞町所在石造物
- ・見て学ぶ・聴いて学ぶ「水と五霞の歴史」

## 開催風景

なお、当初の研究計画で予定していた五霞町内小・中学校に配付予定であった副読本については、展示講演会の開催遅延によるアンケート分析の未了ため副読本の内容決定ができず、本研究の期間内での刊行が果たせなかった。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計8件)

吉田 優・築地貴久・中谷仁美、博物館実物資料の活用を想定した博物館学芸員養成教育プログラムの開発に関する基礎的考察 近世村方文書を中心として、博物館学雑誌、査読有、40-2、2015、109-135

吉田 優、入館者の興味・関心をひきおこす古文書展示のこころみ、日本ミュージアム・マネジメント学会研究紀要、査読有、2015、97-105

吉田 優・小野真嗣・築地貴久・徳永裕之、栗橋城をめぐる歴史的景観の復原、駿台史学、査読有、2015、154、(1)-(26)

吉田 優、博物館展示教育の新地平 歴史系地域博物館の視点から、明治大学学芸員養成課程年報、30、査読無、2015、1-3

駒見和夫、歴史系博物館と地域文化遺産の関連、國學院雑誌、115-8、査読無、2014、38-50

吉田 優、現代のなかの学芸員の隘路、明治大学学芸員養成課程年報、29、査読無、2014、1-4

駒見和夫、学芸員養成教育と大学博物館のアウトリサーチ活動の検討、全博協研究紀要、16、査読有、2014、1-14

駒見和夫、出前講座による博物館リテラシーの育成支援、博物館学雑誌、39-1、2013、41-58

[学会発表](計1件)

吉田 優、戦後地方史研究と歴史系博物館の接点 江戸時代の古文書を中心に考える、全日本博物館学会、2012年6月17日、明治大学(東京都千代田区)

[図書](計6件)

吉田 優・駒見和夫・森朋久・小野真嗣・築地貴久、明治大学吉田優研究室、アンケート調査に基づく歴史系地域博物館展示・設備の実践的研究 平成24年度～平成26年度文部科学省科学研究費補助金(基盤研究(C))

研究成果報告書、2015、153

吉田 優・小野真嗣 他、大学生のための博物館学芸員入門、技報堂出版、2014、130(4-6,9-22,63-64,108-113)

駒見和夫、博物館教育の原理と活動、学文社、2014、288

駒見和夫 他、人文系博物館教育論、学文社、2014、(5-34,224-243)

吉田 優・森朋久・小野真嗣・築地貴久・宮崎賢一・滝本真弓・勝田真幸・中谷仁美 他、町史 五霞の生活史 地誌、五霞町、2013、(1-19,155-305)

駒見和夫 他、博物館学、学文社、2012、(239-255)

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

吉田 優 (YOSHIDA, Masaru)  
明治大学・文学部・准教授  
研究者番号：90267360

### (2) 研究分担者

駒見 和夫 (KOMAMI, Kazuo)  
和洋女子大学・人文社会科学系・教授  
研究者番号：20225577

### (3) 研究協力者

森 朋久 (MORI, Tomohisa)  
明治大学兼任講師  
徳永 裕之 (TOKUNAGA, Hiroshi)  
専修大学兼任講師  
小野 真嗣 (ONO, Shinji)  
明治大学大学院博士後期課程  
築地 貴久 (TSUKIJI, Takahisa)  
明治大学大学院博士後期課程  
宮崎 賢一 (MIYAZAKI, Kenichi)  
明治大学大学院博士後期課程  
滝本 真弓 (TAKIMOTO, Mayumi)  
茨城県立岩井高等学校教諭  
勝田 真幸 (KATUTA, Masayuki)  
葛飾区郷土と天文の博物館臨時職員  
中谷 仁美 (NAKAYA, Hitomi)  
明治大学学芸員養成課程嘱託職員